

ミオヤの光

讚誦要解の巻

安心要領……………一
 讚誦……………三
 如來光明讚嘆章要解……………八
 如來三身の説……………二二
 折轉要解……………二五
 修養のすゝめ……………三一

安心要領

宗教は人の生存に對して最終の目的に指導を與ふものなり即ち身心の向上し靈き生命と爲んが爲に偉大なる力を有せる神尊に歸し此に依て永遠の生命と常住の平和に入る道を教ゆる然らば何らか歸す所の主尊、何らか求むべき所、何らか目的を遂げべき行業なる是を宗教の三要領とす。

- 一、歸する所の主尊、宇宙の獨尊とし偉大なる力を有し一切を救靈給ふ如來に歸すアミダ如來即ち無限の光明永恒存在の眞神に歸し奉り此活る如來を救の主と仰ぎ一切の時一切の處に於て其神聖なる統治の下に靈き生命として事まつる信心なり。
- 二、求むる所の靈國、生滅變化極りなく憂悲苦惱絶るなき世界に依風の意を轉じて如來大光明の中に而も安立を求め即ち肉に死して靈に復活り此を去らすして即ち極樂界の聖者となる之を精神の更生とす、而して此肉體終て後無餘ネハシなる眞實の

淨土に生ず之を體の更生とす併て是を求むる所の靈國とす。

三、救はるゝ行業、所求の目的を達せんか爲に如來の光明に依りて靈き生命に入る行業なり、先づ主なる如來に歸し大光明を獲んか爲に讚嘆祈禱を捧て拜禮し常に請求感謝の誠心より一ら聖名を以て祈念し若は口稱若は觀念専ら如來を憶念し彼此の三業相離れざるを要す、若は祈禱拜禮または稱名三昧又は坐禪工夫等の心行を作す所以のものは即ち是如來の心光に接し而も靈き生命に入るべき手段たるに外ならず、要する處宇宙の主なる如來を信じその大光明中に安立し之に依て生き働き存すべきにあるなり。

仰いて諸々の賢者に白す、願くば朝夕に於て斯光明讚嘆章及び祈禱をもて而も拜禮し尋常に四六時中大光の中に靈き生活あらんことを祈り玉へ然る則は眞正の幸福は必ず與らるべし。

是宗教安心の要領を陳て以て信念の修養あらんことを勸むる所以なり佛陀禪那敬て言す。

讚誦

▲如來光明讚嘆章

佛阿難に告げたまはく、無量壽如來の、威神、光明、最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり、是故に無量壽如來を無量光佛無邊光佛無礙光佛無對光佛焰王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛と號してまつる、其衆生ありて斯光に遇ものは、三垢消滅し身意柔軟に歡喜勇躍して善心生ぜむ、若三塗勤苦の處に在て此光明を見たらば、皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん、無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞えざることなし、但我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸々の菩薩衆も悉く共に歎譽したまふこと、亦復是の如し、若衆生ありて其光明

の威神功德を聞いて日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に随つて、其國に生ずることを得て諸々の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を稱せられん、其然して後佛道を得る時に至て普ねく十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならん、佛の言く我無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なることを説んに晝夜一劫すとも尙いまだ盡すこと能はじ。

朝の祈禱文

一、獻身の祈禱

法身、報身、應身の聖き名に歸命し奉る

三身即一に在ます最と尊き唯一の如來よ如來の在さる處なきが故に 今現に此處に在ますと信じて一心に恭禮し奉る如來の威力と恩恵とに依て活き働き在ることをえたる我は我身と心の總てを捧げて事へ奉らん
冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂れ給へ

二、勸請の祈禱

我らが主に在ます如來よ 如來の眞應身は在さる處なきが故に今我此身心は如來の靈應を安置すべき宮なりと信す 諸々の聖者の心宮に在せし如く常に我が心殿に在せ給へ今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉る 靈應常住に我心に降臨しこの心身を清めて轉法輪を垂れ給へ

三、進徳の祈禱

慈悲と智慧とに在ます如來よ 教主世尊が六根常に清らかに光顔永へに麗しく在ませしは内靈應に充給ひければなり 我らも完徳の鑑たる世尊に倣ひていかなる境遇にも姿色を變へざることを誓ひ奉る 願くば常に慈悲歡喜 正義 安忍 剛毅 貞操 謙遜、眞實等を體し外は怨親平常に同體大悲の愛をもて佗を視るの靈應を與へ給へ

夕の祈禱文

四

六

一、感謝の祈禱

生命の源に在ます如來よ 如來が與へ給へる明き光と清き空氣と新しき糧とに依て今日の務を果したる恩徳を感謝し奉る 世の人々が聖旨に仕へまつる我名を聞て求道の志を起し我行を見れば惡を止め善に就き我心を知らば苦を離れ樂を得に至りしは全く如來の加被力なれば深く其恩徳を感謝し奉る

二、懺悔の祈禱

無上權威なる如來に告白し奉る 自身は現に是れ罪惡の凡夫心の迷妄よりして爲すべからざる罪を犯し爲すべきを怠るの罪に陥れり是皆自らの過なり實に大なる過なるを自覺して至心に懺悔し奉る 願はくは我罪の汚を滌きて清白靈となし再び過に陥ることなきよう恩をたれて我を護らせ給へ

三、隨喜の祈禱

大慈悲に在ます我らが父よ 我は世の人々に對して瞋恚憎惡嫉妬復讐害意凌辱諷誘等の惡意をして向ひたりき今は恩寵によりて一切の人類は皆兄弟姉妹なることを知るされば人の幸福に於て羨み嫉むことなく人の惱みに於ては傷み慈しみ如來の聖旨を體して同胞互に相扶けんことを誓ひ奉る 願くば我らが父よ我同胞の爲に光榮と幸福とを與へ給へ

四、發願の祈禱

至善なる如來よ 我は心開く罪深き常没流轉の凡夫なりし 然に聖なる召喚の聲に驚きて至心に如來に歸依し奉れり 願はくは我に永遠の生命と常住の平和を與へ給へ 又願くば上は如來の聖寵を被り下は一切の衆生に恩寵を頒つことを得せしめよ 又願くば我を惡魔の誘惑よりさけて聖き道に向上ことを得せしめよ
また與へ玉はりし功德をもて平等一切に及し同じく聖き心を發して共に安寧に在らんことを希ひ奉る

五

七

如來光嘆明讚章要解の序

八

如來は宇宙の生命なり。聖旨に歸命ふものは永恒の生命とならん。
如來は宇宙の光明なり。聖龍を光被るものは聖靈とならん。

六大本ビルの身心なりと識るときは、宇宙の無限なる即ち如來の法身なり。然らば即ち宇宙は外面より觀る時は蒼々たる天地唯物の存在の如くなるも、内は即ち心靈に充滿せ玉ふものと云はん。天地萬物に秩序あり條理あるは全知の作用にて一切の運轉活動は全能の功用にまします。

全知全能即ち如來の光明なり。(若し威力と光明とを分るとき威力を全能とし光明を全知とすべし。今は總てを光明とす。斯光は天則秩序の理法とすまた原動力として一切萬物を産出し活動せしむ。若し宇宙に斯光なからんか、人に精神なきと同じく盲目的死物的秩序もなく活動もなかるべし。然るに萬物に秩序あり運動あるを見る時は、誰か此性能の存在を否定することを得ん。斯光天則の理法として萬物を開發するのみにあらず、進んでは一切の生命を向上し、聖靈と成し、終局の目的なる涅槃に攝取し玉ふ理性存せり。ネハンは永恒不變なる當世の靈界。彼處の萬物は光明常に輝き、唯光榮と靈福に充さる處なり。聖典に示せる法藏の本願十劫正覺の方便法身は此目的の光として示現し給ひしなり。三世の佛陀は此目的の光を衆生に教へんが爲に出でたまへり。神靈不測奇異絶驚べきものは宇宙一大靈力なり。斯光明なり。この光天地に先だち萬物に超へて、始もなく終もなく、永恒本然にして、内に非ず外に非ず、何の時何の處にも存在して不思議の靈能を現はし玉へり。

例へば太陽の能力に光と熱と化合との三線ありて地上の萬物を化育すと同じく、如來の心光には智慧と慈悲と神聖との三靈能ましく、人の知情意に對して明慧と平和と正善とに靈化し玉ふ徳まします。

嗚呼惡哉靈光の及ばす處、各其類に隨ふて化を被らざるなし。三惡劇烈の炎は清涼

九

の風と變じ、天人垢汚の服を浴きて聖靈の衣と化し、二乘見思の間暗て真空の月明かに、菩薩智慧の日月は自心を雙べて照し、佛陀果滿の園には正覺の華開けり。されば一切の佛陀は斯光に依て一切智を證し、一切の聖者は斯光をもて永恒の命を得給へり。教祖釋迦牟尼ガヤの道場に於て正覺を證せし、イエスキリスト、ヨルダンに於て聖靈を感じたる、同じく此永恒の靈光に接したるに外ならず。

有る人が自己心中に在ます神は外萬物の中に存じて光を放つと言ふが如く、此靈光自然界中に存在す、種々の相をもて衆生の爲に應現す。即ち聖典に明す處の觀音の三十三身、不動の忿怒、乃至塵數の示現身、皆是宇宙に遍在せる靈力の發現なり。自然萬物の中に活躍したる靈光は機能團體たる人格に在つて聖的活動をなせり。即ち龍樹天親、ソクラテース、マホメツト、智者、善導、空海、源空の如き靈界の偉人皆此光の人格として現じたるものと云つべし。

宇宙梵塵か此光の如き不思議なるあらん。茲に因て一切の佛陀は吞嚙して讚嘆し、諸の聖者は絶號して稱揚する意に所以あり。

諸の賢者よ、願くば我ら一切諸佛の讚稱し給ふ終局目的の光を信じ、如來の聖旨に歸命し、無明の眠覺め、罪と苦より救靈れ、共に聖き心となりて、同じく彌陀ネハン界に生じ、正覺の華開きて、三身一如の妙果を結ばんことを。

第一節 如來の聖徳

「無量壽如來」最尊第一の五句は總標して宗を擧ぐ。如來は宇宙萬有に對して最尊たるに三義あり。

- 一、如來は絶對的最上者萬有に超勝せる獨一神尊。
 - 一、如來は一切萬物を統攝し諸佛神明を統一せる大威力者。
 - 三、如來は一切の生命を向上し終局目的なるネハんに攝取し給ふ大光明者。
- 譬へば自我が人の精神及び身體を支配する如く、帝王が一國の人民を統御する如く、

一

天體に太陽が、諸の星宿の中心たる如く、如來は宇宙萬有を統攝し一切佛陀天神の最勝尊なり故に威神光明最尊第一なりとす。

是故に無量壽佛の下別して名を列ねて聖徳を表はす。聖徳無邊。十二の徳名を以て其性能を顯はすに悉く盡ざるなし。

無量光（法身。體大。處として實在せざるなし。）此下三再は如來の體相用の三大として宇宙に遍在せる性能なる事を明す。法身は宇宙の實體、一切佛陀の本地、諸天神明を統一せる尊體也。斯如來心體を體得するものは即ち正覺を成す。

無邊光（一切慧、處として照さざるなし。）如來四智圓明の大慧光は遍く法界を照し、衆生の知見を啓示して無上菩提を證らしむ。

無礙光（解脱の用、處とし化せざるなし。）如來の靈力は、神聖、正義、恩寵の徳をもて衆生肉我の束縛を解きて大我の中に靈的自由を與へ、大ネハンを得せしむ。

無對光。上の三光の力によりて救生れたるもの、終局に歸する處、上菩提の華開きし大ネハンの都、眞善美の靈界、諸佛聖者の證入する境、常寂光土又は蓮華藏界の名をもて表せらる。諸佛こゝに至りてミダの本覺に還り、衆生此に歸して無上の果位とす。一切に超絶す故に無對光と名く。

炎王光、世の衆生の惡質を滅殺する光用。衆生に生靈を覆ふ所の惡質存す。即ち惑業苦の三障是なり。惑とは罪惡の要素即ち煩惱なり。人此煩惱に因て惡業を作す。業困あれば必ず苦毒の果を受く。斯光よく此三障を撲滅すること恰も火炎のよく諸々の不淨物を焚盡すが如し。故に例をもて炎王と名く。

清淨光。人の感覺を美化す。此下四光は人の心理に被むる處の光。衆生の眼耳鼻舌身の五官が外界の色聲香味觸の五塵の爲めに染汚さる。然るに斯光に美化せらるる感性は四面玲瓏靈香馥郁五根清淨にして外塵の爲に惹れず。例へば蓮花の汚泥より出でて而も染著せざるが如し。

歡喜光（人の感性を融化す。）肉我の感情は諸々の苦毒と罪惡とに充さる。若し此光

に融化せる眞情は平和と歡喜とは如來の泉より湧き、自然の妙樂は天地と共に盡ることなく、心廣く體肝かに、人生の靈福こゝに於て極みとす。

智慧光（知力に對して知見を與ふ。）人の知力は無明にして自ら眞理を悟る能はず。斯衆生に佛知見を與へ神祕の内面を啓示す。即ち如來の相好光明、莊嚴淨土の相、また内包の徳たる慈悲、智慧、等の聖相、乃至眞法身に至るまでを知見せしむ。又一切の三昧智慧神通等は悉く皆斯光より與へられむ。

不斷光（人の意志を變化す。）人の肉我の意志は我意利己主義にして俗情非靈態なり然るに斯光に靈化せらる、時は生靈態、高等なる道德意志と成りて向上的には聖意の提導に隨ひ、また自他平等の愛をもて二利を圓滿にす。

難思光（信心喚起の位。）此下三光は人の修行の三階に對する如來の光。如來の靈光玄妙甚深、初心の輩が能く測るべきに非ず、初心は唯一ら不思議の神光を仰信し、斯光に接せんが爲に三心五行をもて恩寵の喚起を期す。

無稱光（心靈開發の位。）若し人三心五行をもて信念を修養し、如來の光に接し心靈開發する時、即ち如來の聖相を知見し、また法忍を證る。然るに其自證の妙味は言語をもて詮表すること能はず故に無稱と爲す。

超日月光（聖旨體現の位。）己に心光に感じ、意志靈化し、己れは即ち如來の聖旨を體し、而して行爲と言語と思想とに於て靈的行爲を實際に爲すべき位なり。

「其衆生有りて」の下光明十界を攝す。如來不可思議の光明は遍く法界を照して凡聖咸く其益を被むる。初に天人を益す。衆生の三垢とは貪欲瞋慧愚痴の三毒、よく人の心意を垢汚すが故に名づく。また三垢とは人の知情意の三能を汚す處の惡質なり。即ち知力の垢たる無明と惡知を除きて眞理を明かにし、心情の垢たる苦惱及び忿恨等の煩惱を除きて而も平和と歡喜なる

心情と意し意志の垢たる我意薄弱の意を矯め、高尚なる理想と遠大なる希望をもて向上的に進行すべき道德的行爲をなさしむ。故に「斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔

輒に歡喜勇躍して善心生ぜん」と。

「若三塗勤苦」の下は、三惡道の爲に拔苦與樂の益を明す。「三塗」とは地獄餓鬼畜生の三惡道を云ふ。若し衆生斯光に背き、邪惡殘害、極重の惡を造る者は、地獄に墮すべき性格なり。嫉妬慳貪を本とし、肉慾我慾、中品の惡を作すものは餓鬼道の業なり。愚痴弊惡にして横的情操、下品の惡業は即ち畜生の類比なり。視よ、世に形に於てこそ人類に相似たれ、其情操と行爲をもて判断を下す時は、餓鬼道畜生道炳然たるにあらすや。斯る惡道に墮すべき性格なる惡人と雖も、斯光眞理に照され、全く既往の罪惡を自覺し、悔ひ改ためて聖旨に歸命する時は便ち救はれむ。いかにとなれば、大なる慈悲の光は千年の闇室をも忽ちに照破すべければなり。故に三塗勤苦の衆生も斯光に遇ふ時は即ち解脱を得んと。

「無量壽佛光明顯赫」の下は、四聖同化を明す。聲聞緣覺の二乘は自利の小聖、甲は四諦の理を觀じ、乙は十二因縁の法を緣じ、共に見思の煩惱を斷じ、眞空無我の理を悟り、同じくネハンの妙果を期す。斯二聖は此光の消極の方面なる眞空のみを證得て已に解脱せりと謂ひ、積極の方面は未だ曾て識らざる所なり。

菩薩は覺有情として、即ち斯光に由て靈的生活をなす聖者なり。斯光の萬德豐備を自己の理想とし、聖旨を實現する爲に益向上し、下は一切衆生を自己と同じく光の生活とし、自他平等の利益を期するのを菩薩と爲す。

佛陀は三身具に證り、四智圓かに照し、斯光と全く一致し、肉我の缺點悉く盡き斯光と體を一にし、斯光の能力をもて自己の力とし、清淨法身は常にネハン界に安住し、外は身を百億に分ちて衆生を度す之を佛陀と爲す。

靈異絶妙不可思議なる光明。一切諸佛は斯光に依て正覺を成し、一切の聖者は斯光に由て聖靈と化す。斯光の恩德廣大なり。故に共に其靈能を讚稱して止まず。

第二節 修行信心分 (如來光明を獲得する修行三階あり)

喚起 開發 體現

「若衆生有」の四句は心光の喚起と開發を明す。其光明威神功德を聞とは是如來の恩寵を獲得すべき信念の要素なり。上の如き光明の眞理を聞き、之が信念の動機となりて、宗教衝動として如來に憧がれ、歸命信賴の心意益發達して心光を被り信念を喚起す。

信念修養に三要法あり。三心、四修、五聖行、是なり。

「至心に三心あり、聖意に相應べき心の三德」一、至心に自己の罪惡を自覺り、専ら如來の恩寵を信認む。二、感情に於てはすべてに超て如來を愛慕し至心に憶念して止まず。三、靈國に生じ聖き世嗣とならんことを欲す。

「不斷」に四修あり。一、如來に對して無上の尊敬を捧げて。二、一行三昧に専ら如來を念じて餘想を雜へず。三、聖意を體信し相續して斷せず。四、聖意を體得して終身中止せず。

「稱説」に五聖行あり。一、救世の福音なる聖典をよみ如來の聖德及び淨土莊嚴等を識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕等の拜禮をもて信念を修養す。三、如來の好相淨土莊嚴の相及如來の智慧聖德を知見せんか爲に冥想觀念をも修養す。四、一心に聖名を稱へ聖旨の現はれを祈り、恩德感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖德を讚頌し、また香華珍膳等の供ものをもて而も修養す。

斯三要法の中、初の三心は如來の靈應を感じ心光を獲得すべき人の心意にて。四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする處は自己の心意と如來の恩寵との投合にあり。即ち自己を如來の光明に投歸没入し肉我に死し靈我に復活するにあり。要する處若しくは口稱、若しくは憶念、一行三昧をもて一に如來に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若しくは頓速に若しくは漸次に如來の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覺醒し心靈の曙となりぬべし、之を恩寵の喚起と爲す。

開發。上の三心五行によりて信心覺醒し、如來の心光をもて自己を返照する時は、己が罪惡を自覺し、道心の苦悶を感じ、尙進んで心靈の開發を期する時、心光内に薫じ恩寵の和氣を感じ、七覺心の華開き、妙感靈應の神機、四面玲瓏歡天喜地、身心融液不可思議、其内容の真味は言語道斷に念慮の絶たる處、こゝに於て全く肉我の罪より脱て靈我の生命とし、心機一轉たるに及びて即ち人格の革新なり、之を精神の更生とす。經に「心の所願に隨て其國に生ず」と。

體現、信仰の結果。恩寵開發の目的は心光を體現すべき實行にあり。「其國に生」とは往生即ち更生なり。此に二位あり。精神と及び身體なり。精神の更生とは従前の肉我を轉じて真我の生命と化り、情操一變する處、便ち新しき人となる。光明界裡の者として昨日の我と異なる觀あり。有餘の依身は變らねど神は淨土に棲遊ぶ。聖懷の中に安立する真情は毀譽八風の爲に動搖されず。既に精神更生し去て現世界を觀じ來る時は、昨日のそれと異れり。曾て蔑視したる如き厭穢の魔郷にあらで、是よりは彌向上し目的なる真理の靈界に進むべき菩薩が天職を果すべき方便修行士なりし。

斯光吾人を自覺せしむるに人生の真理を以てす。然り而して吾人はいかに聖意を體現せん。いな光榮を現はすべき行動せん。曰く、吾人は聖子たる靈我實現の爲にあらゆる力を竭すべきにあり。即ち理想の觀音として我と他とを同一視し、他の苦は即ち己が苦なり、己が樂を以て他に分たんと欲す。正義の意志は勢至と同ふし、即ち己を尅め己を憐て聖意の現はれにつとめ。己が分を守り他人の福祉を保護し、又眞勇沈毅いかなることに望みても屈せず撓まず、また吾人は不動の智劍を執りて己が貪瞋痴を害し。地藏の愛に倣ひて世の人に待せん。高尚なる理想を文珠の聖童に習ひ、遠大なる希望を普賢の行願に學び。向上進趣、萬善萬行をもて此土に樂邦を實現さん惡人の迫害は心靈を研くの利器。一切の誘惑は尅己忍耐の試験具、若し現世界を以て目的ある階梯なる修行土と觀じ來る時は、菩薩六度萬行を修すべき諸の器具が全備るに非ずや。經に此土一日の修行は淨土に於て百歳するに勝れりと。吾人は斯る大

利なる此土なることを自覺するが故に、寸陰を寶とし己に本務を竭さんとすべく、然り而して方便土のつとめを全く卒る日には、必ず目的たる實在の報土、即ち無餘涅槃界に歸る期あるを信す。經に「其國に生じ諸の菩薩聲聞大衆と共に曠譽して其功德を稱せられ」とは蓋し精神更生し已て聖旨實現の爲に活動せる人を稱するなり。身體の更生。已に更生したる精神は如來大心中に理想の淨土に逍遙ぶもの、肉の有らん限りは自然の約束を全く脱する能はず。彌方便の業を卒る曉には、無明生死の夢醒て大ネハン城にて無上菩提の宮に住し、眞善妙美の園には常樂我淨の華鮮かに四智圓滿の日は明けく、三身一如の月清らかなり。然るときは即ち體は本覺の都に在て化を百億に分ち、こゝに於て一切諸佛は即ち本覺の彌陀。彌陀即一切諸佛たるの眞理は自ら證らん。

如來三身の説

如來は本一體にして三身まします。三身とは、法身、報身、應身是なり。法身は宇宙萬有の源にして天地萬物を産出し保存する權能あり。法身は始もなく終もなく本然の自性なれば自性天真佛と曰ひ、宇宙全體が如來の身心に在まれば之を物心不二のビルシャナと云ひ、また法身は一如の體にましますも内容豊富の性徳を含藏するが故に如來藏性と名く。法身佛に一切智一切能の兩徳を有し、天地萬物を開發し産出するに秩序を整束せる理性を一切智と曰ひ、萬物を生活々動せしむるを一切能と云ふ。法身の權能によりて生存せる精神生命を向上しそれを終局目的の大涅槃に據め取りて無上覺を證せしむるは報身の權能なり。報身如來とは本智慧法身の體相もなく形も無きなれども不可思議の靈力より、衆生の爲に萬德圓滿を表せると麗しき相好を具へ威嚴巍巍金銀摩尼寶石を以て莊嚴せる樓閣に光明永へに輝き、唯光榮と靈福とに充さるゝ處に在して、神聖正義慈悲等の聖徳圓かに備へて光明遍く法界を照し信念の衆生を攝めて報土涅槃の常樂を得せし

ひ。報身は釋迦如來が證見給ふ境界にて吾人が信仰の報ひとして攝取せらるゝ處なり。

應身 現世界の無明と罪惡とに迷没る物を哀憐み、報身より身を分ちて人類と同じき身を以て世に出で衆生を救度するを應身と爲す。教祖釋迦牟尼はなり。佛陀初めトシタ天に在して天上及び下界を利益し、地上に出で中印度カピラの淨飯王を父とし、マヤ夫人を母とし、幼名をシタルダと曰ふ、聰明睿智五明四吠陀に精通し、伎藝として習ふに成らざるなし、四門の遊びに世の無常を悟り、國と位とを捨て山に入て道を學し勤苦すること六年、竟にマカダ國ガヤのヒバラ樹の下金剛座に座し、禪那三昧に入て一夜天魔の碍を降伏し臘月八日東の天に明星の輝き出る時無明永夜の夢覺めて豁然として正覺を成し罪惡の源を解脱し眞理を悟り給ふ。佛陀は正覺の曉よりネハンの夕に至るまで教ゆるに涅槃の眞理を以てす。涅槃とは無明生死の眠覺て本眞如の顯はれたる常寂光の都、無量の光明輝く處なり。佛陀は八十歳にしてクシナなる樹林に於て別を告るに先だちて其徒に示して曰く、我ガヤの菩提樹下に於て正覺を得たるは方便示現の身に於て、眞法身は無量壽如來にて在れば永恒に常住して而も滅度し給はず。凡夫が肉眼にて見る處の世界は時ありて滅すべきも我眞實の淨土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の寶をもて莊嚴せり、佛陀は一切の衆生を教へてネハン即ち淨土に誘く爲に世に出たりと。

法身としては天則秩序に天地萬物を産出し保存し、報身としては終局目的の規律に従つて衆生を攝取して淨土に歸趣せしめ、應身としては人の身をもて衆生を教化す。斯三身は衆生の爲に三容に現するも本一體にましませり。

祈禱要解

獻身とは先づ第一に己が無知無力を自覺し、己を空ふして全幅を擡げて如來に事へ奉る。文に四あり。一、宗教の要たる獨一の木尊に對して始終心を一にし無上の尊

敬をなすこと。二、一切處に存在し玉ふ活る如來を信じて至誠心をもて恭敬ふべきこと。三、此身心は如來に依て生存る故にアナタに獻げて仕へ奉ること。四、身の行爲と口の言語と意の思想に於て光榮を現はすべきこと。

解。在ざる處なきは經に「如來は是法界の身、一切衆生心想の中に入る」と録せり。

勸請。如來の分身たる靈應身を我身心に請じて常住の指導を祈る。

一、此身は如來の靈應を安置し奉る聖なる宮と信すべきこと。二、靈應の常住を請ふこと。三、聖意の指導を仰ぐこと。

解。靈應とは小乗教の五分法身即ち戒定慧解脱々々知見と同じ。彼にはたとへ肉身の釋迦佛陀は已に滅し玉ふとも五分法身は羯磨の法に依て發得し人の身内に常在して滅する事なしと。大乘教にては即ち如來眞法身として其靈能は本より法界に遍在し、人の信念ある處に隨て發得す是を應身と名づく。この感應を得て始めて靈の生命とし活る信仰と成り得るなり。諸の聖者とは、觀音變至文殊普賢等の法身のボツツ、龍樹天現善導法然等の生身の聖者、斯らの聖者には如來の分身たる靈應が其身心に存在し智慧兼備し、自他並べ利し、如來の聖旨を其身の行爲によりて現し玉ふ。觀音の寶冠に一の化佛を戴けるは即ち是ミダの分身たる靈應が其腦裡に存在せるを表はし、而して何人の信仰も之に倣ふべきことを示し玉へるなり。

進德。聖意を體して靈の行爲を成就せられんことをいひのる。

一、道徳の原動力は如來の靈應なること。二、教祖、釋迦文はミダの人格現なること。三、釋迦文は教主にしてまた完徳の鑑たること。四、靈應に充されていかなる境遇にも動かざるを誓ふこと。五、弱き我に至善の國に進むべき道徳行爲を成しうるやうに聖恵を仰ぐこと。

解。麗色とは斯經の序に「爾時世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり」とは世尊が斯經を説玉ふに先だち、いと麗しき相を示し玉ふ。ゆるは斯經に説く處の如來

を信じ其慈光を得たる時は何人も皆内心が靈に充され内外共に清淨になり得べきを表はし玉ひしなり。

釋尊姿色常に清かなるは内にミダの靈に充ち玉へばなり。世尊はいかなる境遇に臨みて麗色を變じ給ふことなし例へば一時ダイバがアジャセ王を唆きて世尊を矯り請して火坑に陥して殺し奉らんとす。世尊は斯る急難に遇玉ひし時に當り光顔殊に麗しく欣笑して光を放ち玉ふ。時に王其尊容のいと殊勝なるを拜し感じて始めて佛陀に歸し奉れりと。また世尊は諸の外道の迫害にも旃荼彌の讒謗にも姿色毫しも毀損し給ふことなし。世尊は害意をもて向ふ處のダイバに於るとラゴラに於ると何れにも愛憎の異想あることなしと。世の人々が貪瞋内に動く時は忽ち其面貌に現はす。世尊は内靈に充ち玉ふいかなる境遇にも光顔を變じ玉ふことなし。

感謝。夕には今日己が身と意とに行爲のいかとなりしやを反省し、善事は悉く恩恵によるものとして深く感謝し、悪事は皆己が過なるが故に懺悔すべし。

感謝に二意あり。一、我身は人間として生存したりしも、若し聖き道に向上すべき生活にあらざれば將た何の貴かあらん。然るに如來弱き我に聖なる恩寵を加へて、恩恵を他人にまで頒つことを得さしめ給ひし其恩廣大なり。依て深く感謝し上る。

懺悔。今日の犯したる罪惡は全く己が至らざるより起りしものなれば深く慚愧して悔ひ改むべし。

罪惡を犯したる原因に二あり。一に己が肉を恣にせしより。二、如來の恩寵を忘れしより。

懺悔の時己が罪を吟味すべし罪の目録に三あり。

一如來に對し。如來を忘れざりしか、二、祈念を怠らざりしか、三、祈念の時邪なる思を起さざりしか。

二人人に對し。輕侮憤怒嫉妬害意等のすべて人の生命財産名譽白山等に害を興へざり

しか。

三己に對し傲慢懶惰染汚不攝生不忠愛等をもて徳を損せざりしか。

斯らを能く吟味し己を尅て悔ひ改ため再び犯さざることを要す。

隨喜。一切衆生は悉く皆同胞なれば靈的同情をもて其幸福を喜ぶ。

一、從前の排他妄他利己主義は全く非なりしを自覺し。二、唯一の慈父をやる時は四海悉く兄弟として相待すること。三、同胞互に相資けて向上をはかること。慈父に對して同胞の幸福を求むること。

解。我らが父とは經に三界は我有其中衆生は皆是吾子。唯一の慈父をやる時は、人類悉く同胞なり。互に相資とは、導師は慈心をもて相向ひ佛眼をもて相視て互に眞の善智識とならんと曰ひし。又大乗の菩薩は六度四攝をもて他の福祉を増進せしむるを以て己がつとめとす。

發願とは最終の目的とする遠大の希望なり。

一、從來我れ眞理に向ふべき目的を過りし全く心の無明に起因す。二、如來の恩寵によりて我は覺醒たり。三、終局の要求とし永遠の生命と常住の平和を望むこと。四、大乘ボサツの志願なる上求菩提下化衆生を遂げんこと。五、邪をさけ正に進むこと。六、一切衆生と共に平等の安寧を求むること。

文に「彼國に到り畢て神通を得て十方界に入て苦の衆生を救はん虚空法界も盡んや我願もまた是の如くならん」と發願す。

修養のすゝめ

諸賢よ心靈修養の要に祈禱拜禮、念佛三昧、坐禪工夫等あり是らの方法により如來の光明を獲得し聖き人となり善き生活に至るを目的とす。禪の大悟見性他力門の信心開發、キリスト教の精靈に感じたりと曰ひ名を異にすれども歸する處此大光明に接するに外ならず斯光を感得して初めていける信仰に入たるものとすされば求めよ眞理の光明を。

大正十四年十月廿五日印刷
同 廿五日發行